

活用が検討されてきた。例えば、制作プロセスにおいてコロナ対応でリモートプロダクションが進行する。東京オリンピックの放送を担ったOBSは、フルクラウドで構築している。また、素材管理でも番組数の増加に応じた保管容量の確保を段階的な設備投資ではなく利用したコスト分負担に変化し、送出・配信でも視聴者の増減や配信番組数の変化に応じて規模に対応できるという柔軟性が見えてきた。

また、素材の伝送やコンテンツ配信の回線確保では、クラウドにコンテンツ送信のCDNサービスが登場してきた。今後、5G通信により基地局がクラウドのエッジとして機能するようになると、CDNの対応範囲がインターネット全域に及ぶ。つまり、ATSC3.0やDVB-T/S/

CとDVB-NIPはCDNの一部としての機能になっていくという展望があるのではないだろうか。

そうした展望を見据えたためか、英国における電気通信・放送などの規律・監督を行う規制機関Ofcom (Office of Communications) が新たなブロードバンド政策として、ユーザーがキャリアを転換しやすい「ネットワークスイッチ」を進めると宣言した。これも放送のインターネット化を裏で支えるポイントではないかと思う。

6. 電波による放送との違いは何か

技術規格の議論もあるが、欧州では「IPとクラウドによる放送とは何か」「電波による放送との違い」について制度も含めた検討が進

んでいるようだ。

視聴者の生活様式の変化への対応があり、特に若い世代の情報源が放送サービスからインターネットに大きく変わってきたことで、放送サービスもそこへ出ていくことを考え、規格づくりから始めている。では、放送免許を持った既存放送事業者がインターネットでサービスすることの利点は何か。また、インターネット上で「放送免許」という意味はあるのか。放送番組のコードがどういう役割を持つのか。そのあたりをゼロからの議論を深めている。つまり、放送制度の改革を含め、放送規格と並行して公共放送、放送免許事業の再定義を進めている。そのためのキーワードは「信頼できる情報の提供」である。

Column

民放の先陣を切って ネット同時配信「日テレ系ライブ」始まる

(レポート:吉井 勇・本誌編集部)

10月2日(土)夜7時、TVer上で「日テレ系ライブ」が始まった。1953年8月28日のアナログ放送、2003年12月1日の地上デジタル放送スタートに次ぎ、無料CM同時配信は一つの放送史を刻んだ。プライムタイム(午後7~11時)の番組を中心に始まった、この取り組みでは、昨年3月1日から試行、4月1日から本格開始した「NHKプラス」が先行する。1年半の遅れだが、民放の先駆者としてのスタートだ。

さっそくアクセスしてみた。ワンセグプレーヤーで放送、PCとスマホでネット経由のTVer上の配信を「同時視聴」した。TVerにアクセスすると、「リアルタイムで視聴できるというテレビ番組の新しい楽しみ方」ができる。

関心の一つに広告のタイミングがあった。TVerではCMが番組開始前とミッドロール、最

後に流れるが、地上テレビ放送とは違う。日テレ系ライブ配信は放送と同じフォーマットだ。

この「配信プレイアウトシステム」を日テレ技術陣はクラウド(AWS)に構築している。クラウドプレイアウトシステム「KRONOS」(クロノス)の独自開発を本誌10月号でレポートしている。

取材で明らかになった事実が、「オペレーションは専門会社に依頼しようと考えていたが、開発を一緒に進める中でマスター担当が取り組んでいる」という。

放送とネットのPC、スマホの同時視聴からわかったことは、CMの内容が放送と、PC、スマホで異なっていたことだ。PCとスマホ

はターゲティングができるので、TVer登録時のアンケートによる属性などで判断されている。CMのターゲティング配信には「Google AD Manager」を使っている。

放送で権利処理されているオリンピックの競技映像のある番組で、ネット同時配信では「権利のため表示できない」という画面に変わる。この放送とネットの権利処理については次号1月号で考えていきたい。ちなみに、ほかのキー局も、テレビ東京が12月、来年初めにテレビ朝日、年度内にTBSとフジテレビも開始する予定だ。

